

「生命倫理と家族の未来」

特別講座「教学と現代」を開催

金子 昭

おやさと研究所では、3月25日の午後、天理大学研究棟第1会議室を会場に、2017年度特別講座「教学と現代」を開催した。これは、2015年度から行ってきた3回シリーズ「家族をめぐる諸問題」の最終回になる。第1回目（2015年度）は、昨今の無縁社会など社会構造の変化から家族の現状を取り上げ、天理教からどのような対応が可能かについて討議した。第2回目（2016年度）は、社会福祉的な専門性や実践を踏まえ、天理教的家族観のあり方について議論を行った。

今回（2017年度）は、シリーズ最終回として、「生命倫理と家族の未来」というテーマを掲げ、生命倫理から家族の近未来を見据えて、これに対する天理教のアプローチを深める試みである。医療技術の進展によって人間の生命操作や改変が可能になり、家族のあり方もそれに伴って、予想もつかないような形で変わりうる時代となった。テーマ設定の背景には、家族の近未来を考える際、生命倫理の問題を外すことができない状況になったことが挙げられる。

最初に、佐藤孝則研究員が「生命操作の視点から『臓器移植・生殖医療・ゲノム編集』を考える」という基調講演を行った。佐藤研究員は生命操作に関する見取り図を提示し、移植医療・生殖補助・遺伝子操作が重なる領域として再生医療（ゲノム編集・iPS細胞など）を位置づけた。そして、この見取り図に基づき、それぞれの領域における最先端の状況やそこで出現している生命倫理上の諸問題について詳しく解説した。とくに、2012年新たに開発されたゲノム編集技術（CRISPER/Cas9）により、遺伝子治療が大きく進展する期待が出てきた一方、中国の研究者が2015年にゲノム編集によりヒト受精卵の遺伝子改変を行ったと報道されるなど、倫理的問題に対する危惧を表明。また、現在においても、生命保険の加入等ですでに遺伝子差別の問題が存在していることなど、佐藤研究員は実例を挙げながら、遺伝子レベルでの生命操作の問題点を指摘した。佐藤研究員はこうした生命操作の諸問題やその論点を紹介した後、人体への侵襲性の大小と「修理肥」のあり方を組み合わせつつ、天理教的生命倫理の独自の構想を提示した。

休憩をはさんでその後、パネルディスカッション「生命操作はどこまで認められるか—「確かな拠り所」と家族の近未来」に入った。まずパネリスト発題として、深谷耕治天理大学非常勤講師が「医療現場と宗教の関わり」、堀内みどり研究所主任が「生命倫理の諸事例から」をそれぞれ発表し、その後で佐藤研究員も交えて、全体討議に移った。

深谷講師は、陽気ぐらしに向かう道中の一時的な補助輪として、医療とおさづけの意義を教理に即して述べた上で、天理教ではただ単に「その場のたすかり」ではなく、人間始まりの元を知らせることによって「病の根を切るたすかり」を重視することを強調した。そして、天理よろづ相談所病院「憩の家」での事情部講師の聞き取りから、入院患者がおさづけをどう受け



講師を囲んで集合写真

止めているか、幾つかの事例について紹介した。同病院では未信者の患者が8割以上であるが、患者全体の9割がおさづけを受け入れているという。その一方で、患者の入院日数の減少や個人情報保護法の影響により、事情部講師との交流が以前に比べて難しくなってきたという状況も報告された。

堀内主任は、主に生殖医療の倫理問題を取り上げ、人工授精や体外受精、また代理懐胎の普及により、遺伝上の親と産みの親が異なるなど、従来にない家族のあり方が現実に出現してきたことを指摘。その一方で、出生前診断によって生命の選別が行われており、その結果、妊娠・出産の現場では生命の誕生を目指しているが、生命の選別によって、生命の切り捨てもなされるという矛盾した事態が出現している。また、どんなに医療技術が進んだとしても、妊娠・出産は女性の身体から切り離すことができない。そのような生殖医療における女性の身体への侵襲性の問題にも言及した。さらに堀内主任は、夫婦になれば子どもを産むものとか、親になって一人前と見なすという社会的な圧力があり、これらの問題について天理教の教えの上からどう思索し、当事者にどう寄り添っていけばよいのかという問題提起を行った。

これらの発題を受け、発題者相互によるやり取りが行われたほか、フロアからも、脳死・臓器移植など生命倫理についての天理教の新たな見解を問う質問、不妊の人々に対する従来の教理的説き方の問題を指摘する意見などが出され、活発な質疑応答、意見交換が行われた。

最後に、高見宇造研究所長により総括コメントがなされた。高見所長は、天理教における献血ひのきしんを例に取り上げ、当初は献血がかしもの・かりもの理に反するのではないかという反対意見もあったものの、おたすけの一環であるという教理的実践の位置づけにより、天理教としてこの活動を大きく推進するに至った事例を紹介。生命倫理の教理的解釈が困難な場合であっても、これを行うことが真の意味でおたすけになるかどうかという、どこまでもぶれない基本軸で考えていくことの大切さを強調した。

特別講座「教学と現代」は今後も年1回開催し、現代社会の諸問題に対する天理教の実践教理的応答について、おやさと研究所として取り組んでいく予定である。